

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ジョルジオ・アルマーニというたいへん有名なイタリアのファッションデザイナーがいます。一九三四年生まれです。彼のインタビューが二〇二一年六月の読売新聞に載っていました。

今回のコロナ禍について、アルマーニ氏は「あらゆるもののスピードを落として、配置転換する機会になると思う」と述べています。そして、ファッション業界は立ち止まって考える時期にきており、移り変わる流行に翻弄されないものをつくる必要がある。いつも着ていて長持ちするものをつくること、それがファッション業界がとるべき持続可能な道なのだ――と。

大量に衣服を買い込んで短期間だけ着て捨ててしまう時代ではない、という意見にはほくも賛成です。「多くを入手して、多くを捨てる」という方法は、けっして持続可能なライフスタイルではありません。

「アルマーニ」は上級国民御用達と思われるようなファッションブランドです。そんな高級ブランドの総帥が、①時代を見つめながら語る言葉が、ほくにはとても新鮮に聞こえました。

中世、法然を源流とする日本の浄土教は「捨てる」ことを出発点としました。当時の最高学府であった比叡山でとびぬけた秀才であった法然は、やがて山を降りて世俗の巷に身を投じます。彼は「余計な知識を捨てる、赤子のように無心に念仏ひと筋に帰せ」と語り、その思想は親鸞、一遍に引き継がれました。

親鸞も比叡山を中退した人です。日蓮も道元も出世コースを捨てました。究極は遊行僧の一遍で、「捨聖」と呼ばれていました。中世には、世を捨てて簡素な生活に身を投じる、隠遁と呼ばれるライフスタイルが文人や貴族のあいだで流行しました。捨てようにも捨てられないAしがらみのなかで生きる人々は「捨てる生きかた」にあこがれ、鴨長明など多くの隠遁スターが生まれました。

そうした②東洋的な思想とかすかにつながっているところから、現代の「断捨離」が欧米でも注目を集めたのでしよう。モノたちに感謝し合掌して捨てる、といったアイデアも新鮮だったと思います。

ぼく自身、「捨てる生きかた」にあこがれを抱いてきたひとりでした。ですが、戦後のモノ不足のなかで育ち、ぎりぎりのアルバイト生活で青年期を過ごし、いつのまにかモノに囲まれて暮らすようになっていました。

九州から上京して大学に入った当初は、泊まる部屋さえありませんでした。いまでいうホームレス生活です。「捨てる」どころか、「拾う」ものはないかとキョロキョロしていたのです。

「捨てない生きかた」も悪くない――。

手に入れるのに苦労したとしても、Bたやすく手に入ったとしても、いまそこにあるモノには、手に入れたときの感情と風景、そして数年、数十年とともに時を過ごしてきた〈記憶〉が宿っています。

捨てるな、とはけっして言いません。しかし、モノをどうしても捨てられない気持ち、そして、モノを捨てない生きかたということには、③すてきな道理がちゃんとあるということを知っておいていただきたいのです。

(中略)

ぼくは〈モノを捨てる〉ということをめつたにしません。着なくなった服や、もう履く可能性のない靴、古いトランクなど、山のような「Cカラクタ」に囲まれていると言っているほどの暮らしぶりです。

捨てたいのに捨てられない。そういうことは少しちがうような気がしています。

ぼくの場合、「あえて捨てるようなことはしない」という感じでしょうか。

なぜあえて捨てないのかと言えば、身のまわりにあるモノたちを見たり手にとったりすると、まず、それを手に入れたときの〈記憶〉がわざわざよみがえってくるからです。そして、そのモノがきっかけとなって、当時の出来事や空気を一気に思い出します。

たとえば、古ぼけたマッチひとつをとつても、そういうことが起こります。それがとてもおもしろいのです。

とは言っても、④けっして「捨てる」ということに反対しているわけではありません。モノを捨てるな、などというメッセージを発信するつもりはありません。

ただ、生活空間をスッキリさせなければいけないという強迫観念にとらわれている現代人が少なからずいるのだとすれば、もちろんそれもひとつの生きかただけれども、そうではない、モノを捨てない生きかたというものを考えてもいいのではないか。そう思っているだけです。

もし、この瞬間に、身のまわりにあるモノをすべて捨てて、スッキリした空間に身をおいたとします。はたして、幸福でしょうか。

モノをどんどん捨てていくということは、自分が生きてきた人生、そして、自分が過ごしてきた時代という〈歴史〉を捨てていくのと同じことのように思います。

自分が暮らしている部屋から、奥行きというものがどんどん失われていくような気がするのです。

捨てられないのは、もちろん執着する心があるからでしょう。

執着はよくないという話も聞きますが、モノに執着し、ヒトに執着し、イノチに執着するのが人間というものです。

いよいよ「人生百年時代」がやってきました。

日本人の平均寿命を考えれば、少なくとも九十歳までは生きるのだと覚悟しておくほうがいい。かつては六十歳が人生一区切りと考えられていましたが、いまはそこからの三十年間をもっと大切にしなければいけない時代です。

でも、どうでしょう。この、六十歳からの後半生を中心として考える人生の指針、人生観というものが、まだできていないような気がしません。

そういうなかで、ぼくは「捨てない生きかた」に、その大きなヒントが隠されているのではないかと考えているのです。

人生の前半期は、山の頂上を目指して懸命に登り続けてきた。そして後半期のいま、下山の段階にある。前進あるのみと励んできた道をふり返りながら、いわば⑤背後を見つめつつ歩いていく。

これはけっして後ろ向きなことでも、さびしいことでもありません。成長期がやつと終わった。これからは成熟に向かって進んでいく。そう考えるほうが正しいと思います。人は裸で生まれてきて、ゴミに囲まれて死んでいく――そういうものではないでしょうか。

記憶という自分が生きてきた証、また時代という歴史の記憶さえ呼び出してくれるモノたちに囲まれて過ごす人生は、とても豊かなものように思います。私たちの後半生は、芳醇な回想の時代であり、黄金の時代なのです。

(五木寛之『捨てない生きかた』による)

- (注1) 翻弄されない——ふり回されない。
 (注2) 御用達——上級国民が強く支持し、愛用しているということ。
 (注3) 総帥——全体を率いる人物。
 (注4) 芳醇——香りが高く、味わい深い様子。

問1 次のⅠ・Ⅱの問いに答えなさい。

Ⅰ ……線部A「しがらみ」、……線部B「たやすく」の意味として最もふさわしいものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「しがらみ」

B 「たやすく」

ア 頭の中のため込まれた、余計なもの
 イ 思い出深く、愛着を感じさせるもの
 ウ 人生の中でたくわえられた、豊かなもの
 エ まとわりついて離れない、じやまなもの

ア 容易に
 イ 運良く
 ウ 意外に
 エ 時間をかけず

Ⅱ ……線部C「ガラクタ」と似た意味になるように、□に入る漢字を考え、慣用句を完成させなさい。

・無□の□物

問2 線部①「時代を見つめながら語る言葉」について説明した次の文の「 」に入ることばを、それぞれの指示に従って答えなさい。

・ファッション業界が「 a・語群」から一つ選び、記号で答える 「ためには、「 b・二十字で探し、はじめの五字をぬき出す」が求められる。

語群

ア 他の業界をリードする

イ 今後も生き残る

ウ いっそう発展を遂げる

エ 社会に寄与する

問3 線部②「東洋的な思想」とは、どのようなものですか。解答らんによくように、本文中のことばを使って十五字以内で答えなさい。

問4 線部③「すてきな道理」についての説明として最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 独りよがりではあるが、理屈として正しいもの。

イ 他のだれよりも美しい生きかたをすること。

ウ 筋が通っており、反論の余地がない主張。

エ 筆者なりによいと納得できるところ。

問5 線部④「けっして『捨てる』ということに反対しているわけではないが、モノを「捨てる」ことへの筆者の感じ方としてふさわしくないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 捨てることよって、心が身軽になる一面もあると思っている。

イ 身辺のモノを捨てすぎてしまえば、かえってむなしくなる。

ウ モノを捨てれば、それを手に入れた当時の記憶も失われる。

エ かつては、捨てる生きかたにあこがれを抱いた時期もあった。

問6 線部⑤「背後を見つめつつ歩いていく」とありますが、これはどういうことですか。その内容を説明したものと最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 若かった時にもっとできることはあつたはずだと、後悔しながら生きること。

イ 過去の人生の数々の思い出を大切に、なつかしみながら余生を送ること。

ウ 前向きに残りの人生を送るために、前半の人生とはちがった生活を送ること。

エ 人生の後半に入ったことを実感し、歳月の流れの早さをかみしめて生きること。

問7 ……線部「ぼくは(モノを捨てる)」ということをめったにしません」とありますが、筆者の言う「捨てない生きかた」とは、どのような生き方ですか。本文中のことばを使って、四十五字以内でまとめなさい。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の藤念真子は、両親との関係がうまくいかず、深くなやんでいました。九月初の土曜日に、真子は家を飛び出します。そのうち夏鈴さんのアトリエに迷い込み、『祈る少女』の絵の前で倒れてしまいました。真子は、夏鈴さんに介抱されたあと、夏鈴さんの母が建てた「イカル荘」に案内され、しばらくそこで暮らしていました。「イカル荘」には、インドネシアからの留学生のデフィン（高校二年生）が滞在しています。ジジさんは、夏鈴さんの父です。蠅太は、夏鈴さんの甥っ子で、真子と同じ私立中学校に通う男の子です。

真子は大きく息をすって、立ちあがった。

「あの、あの」

「あら、ごあいさつするの？」

ママが真子のほうに体を向けた。それを合図のようにして、みんなも真子を見た。

「お世話になりました」と、真子は頭をさげた。

「イカル荘のみんながいなかったら、わたし、こんなに元気で、こんなふうになってなかったと思います。ありがとうございます」

真子はみんなの顔をぐるりと見まわした。

「あの、あの、お願いがあります」

何だろうという表情が並んでいる。

「①もう少し、ここでホームステイさせてください。お願いします」

一気に言うと、頭をさげた。

おどろきの表情がそれぞれの顔に広がっていく。

「あの、いっぱい考えました。わたし、どうしてもここにいたいんです。家にはなかった居場所、ここにある気がしました。ここで生活してたら、いろんなこと、今までのこと、今のこと、これからのこと、考えられるようになってきました」

「ここまでは考えてきたことだ。ところがその先が、頭の中から飛んでしまった。」

「えっと、それで、今、帰っても、また前のような生活にもどってしまいそうで、それが怖くて、わたし、まだ、家には帰れないって……」

頭の中は真っ白だ。何を口走っているのかわからなくなってくる。両手を、強く、強く握りしめた。

そのときだった。②『祈る少女』の絵が目飛びこんできた。アトリエから居間へ、だされていたのだ。

真子の視線が、はじめてその絵に会ったときのようにすい寄せられていく。高窓から差しこむ一筋の光に向かって、やわらかく手を合わせている少女。真子の心のつぶやきを聞き続けてくれた少女の横顔がそこにあった。

真子は、あのとき、絵に話しかけられた気がしたことを、ふっと、思いだした。

（わたしを呼んでくれたんだ）

真子は心の中でつぶやいた。

心から大切に思う絵から漂ってくる少女のオーラ。それが真子の背中をそっと押しした。

心の中にたまっていたものがするすると言葉になってこぼれてきた。

「わたし、ママもパパも好き」

それだけ言うと、真子はゆっくりと息を吐いた。

「わたし、自分自身の不平不満でふくれあがってただけだってわかったの。ママもパパも自分のことも、何もちゃんと見てなかったんだって。わたし、ママもパパも世界で一番大好き、って言うようになりたい。自分のことも。だからそのために、もう少しイカル荘で暮らしたい。」

夏鈴さん、お願いします。ここにいさせてください」

深々と頭をさげた。

たった一羽で旅立っていくピートクルーの姿がふと頭の中に浮かんだ。③過酷な旅に立ち向かっていくその姿が、今の真子に重なった。

イスの音をたててデフィンが立ちあがった。そして、すぐに真子のほうへ来ると、後ろから肩に両手を置いた。

「わたし、賛成ね」

夏鈴さんは、頭に手を当てて高い天井を見あげている。

「真子ちゃん、このところ、思いつめるような表情を時々するなって気になってたんだけど、そういうことだったのか。うーん。パパさん、ママさん、どうですか？ あ、ジジは関係ないからね」

「関係ないとはなんだ。一番の関係者だろうが」

明らかに不満そうな声でジジさんが声をあげた。

「あの」

立ちあがったパパの顔を見つめた。

パパの顔が赤くゆがんでいる。でも鬼の形相ではない。口をあけたり、閉じたりをくり返しはじめる。言おうか言うまいかと、とても迷っているようだ。そして、その迷いが吹っきたかのように、表情が静かになっていった。

パパは、夏鈴さんとジジさんを見た。そして、真子を見つめた。パパの目がうつすらと赤い。パパはゆっくりと、そして深々と頭をさげた。

「④真子を、お願いします」

心にしみる声だった。

ママの目が大きく開いた。そして、あわてて立ちあがると、パパの横で頭をさげた。

「あの、デフィンちゃんだけでも、大変かとは思いますが、⑤真子をお願いします」

ママがふりしぼるような声をあげた。

みんな、しんとした表情を浮かべていた。

すぐに、真子の後ろで声があがった。

「デフィン、夏鈴さんに、大変してないね。真子ちゃんも、大変、ないね」
めずらしくデフィンの声がとがっている。

「どうするんだ、夏鈴。こんなことになっちゃって、ちゃんとしろよ」
ジジさんの声が笑いを含んでいる。

「誤解を解いておきますが、わたし、真子ちゃんのお世話など焼いてませんよ。っていうか、助けてもらっているのはこちらです。ですので、
いてくれるのはかなり、というかほんとにうれしいです。でも、ご両親はそれでいいのですか？」

パパの表情がゆれた。

「ありがとうございます」

横でママがハンカチを目に当てた。

ジジさんが口を開いた。以前のように帰りなさいと言われるのかと思つて、真子は、とっさに身構えた。ところがジジさんの口調は穏やか
だった。

「このイカル荘に、三人の娘が暮らすようになるのか」

ジジさんがイカル荘をゆつくり見まわした。

「こだわりぬいてイカル荘を建てた人、きつと喜んでるな」

しみじみとした口調だった。夏鈴さんがふつと息をすってジジさんを見た。

「そうか。イカルか」

何か思いついたかのようにジジさんが声をあげた。

「イカルの別名は三光鳥だ。そしてその鳴き声は、月・日・星だ。これって、⑥それぞれ、三人の娘にびつたり当てはまるんじゃないかな」

ジジさんは両手を頭の後ろで組んで、天井を見あげた。

「え、どういうこと？」と、夏鈴さんがたずねる。

ジジさんは視線を夏鈴さんにもどして、口を開いた。

「日は太陽、言うまでもなくデフィンだ。月は夏鈴だ。そして、星は、真子ちゃんだな」

「わたし、星？」と、真子がジジさんを見た。

「そうじゃないかな。パパさんとママさんが、いろいろと気がついたり、考えたりするきっかけを作ったのは真子ちゃんだ。昔々、航海する
人が、星を見て、自分の位置を知ったり、進む方向へ A を切ったりしてただろ？ それと同じさ。パパさんとママさんの行くべき道
をさし示したことになるんじゃないのかな」

真子はパパとママを見た。二人でうなずいている。真子は首をかしげて、星、とつぶやいた。

「どうして、わたしは月なの？」

夏鈴さんが不思議そうにジジさんにたずねた。

「太陽のように明るくもないし、星のように人を導いたりしないからに決まってる」

「なんなの、それ。すごく適当じゃない」と、夏鈴さんがB不満そうに抗議した。

「まあ、そうだな。適当といえば適当さ。思いつきでもある。でも、けっこう当たってると思うけどな」と、ジジさんがにやりとした。

ほっとした空気が居間の中に流れた。外では、セミの声に変わって、秋の虫が鳴きはじめている。季節は確実に動いていく。

(よかった……)

真子は虫の声に耳をかたむけた。

颯太が急に話しかけてきた。

「話、ちがうけど、あのさ、真子さ、顔……」

真子は、なにかついているのかと思つて、あわてて顔をさわった。

「いやちがう。あのさ、真子、顔色とかさ、よくなったよな」

颯太は真子の顔を見ながら言い終わると、口いっぱいデザートのケーキを詰めこんだ。

「え？」

返す言葉が真子には見つからない。真子と呼ばれたことにも気がつかない。

次の瞬間、まわりのみんながどっと吹きだした。夏鈴さんは笑いすぎてティッシュで涙をふいている。ジジさんは手をたたいて笑つてい
る。

「な、なんなの？ 意味、わかんない」と、まわりの笑い声にかき消されながら、真子はつぶやいた。そして、ひたすら口を動かしている颯
太を、ぼかんと見つめた。

真子のほおが熱くなってくる。どんどん熱くなってくる。思わず、両手でほおを包みこんだ。

後ろから真子の肩に両手を置いているデフィンが、体を大きくゆらして笑っているのが伝わってくる。そしてその手に力がこもっていった。

真子は体の向きを変えて、デフィンにだきついた。はじめてイカル荘に来たときかかえた大黒柱、それよりもデフィンの体は温かくて、やわ
らかくて、そしてずっと力強かった。

⑦「イカル荘のおかげね」

耳元でデフィンがささやいた。

「え？」

向きなおり、聞き返ししながら、デフィンを見た。デフィンは天井を見あげている。

「イカル荘、夏鈴さんのママ、建てた。深い愛情いっぱい。デフィン、包みこまれる気がいつもするね。イカル荘、大丈夫で思った。はじめ
て日本来て、ものすごく怖かったね。夏鈴さんやジジさんいる、ここ、イカル荘、安心した」

デフィンが笑顔を向けた。

つられるようにして真子もイカル荘にはじめて来たときのことを思いだす。どうなるかなんて考える余裕もなかった。怖がる気持ちすらど

こかへ消えていた。何も考えられなくなっていた真子に、夏鈴さんがやさしくかけてくれた言葉があった。イカル荘へようこそ。真子の一步はそこから始まった。

(にしがきようこ『イカル荘へようこそ』による)

(注) ピークル——真子は、渡り鳥である「サシバ」の鳴き声の特徴をとらえ、こう呼んでいた。

問1 次のI・IIの問いに答えなさい。

I Aに入る船体の一部を表すことばを、ひらがな二字で答えなさい。

II線部B「不満そうに抗議した」と似た意味になるように次の□に入る漢字を答えなさい。
・「難□を示した」

問2 線部①「もう少し、ここでホームステイさせてください」とありますが、真子がこのような依頼をしたのはなぜですか。その理由をまとめた次の表に入る内容を、それぞれの指示に従って答えなさい。

理由①	〈イカル荘〉という「 a・十字でぬき出す」に身を置くことで、「 b・ 語群から一つ選び、記号で答える」から。
理由②	自分の中の「 c・四字でぬき出す」を解消したうえで、両親と自分をしっかりと見つめることで、「 d・八字でぬき出す」と言えるようになりたいから。

語群

- ア 楽しい時間を過ごすことができていた
- イ 仲間とのきずなが結ばれていた
- ウ 理想の自分の姿が見えはじめていた
- エ 心の整理がつきはじめていた

問3 線部②『祈る少女』の絵とありますが、この絵は真子にとって、どのような存在であると考えられますか。最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 真子がそのようになりたいと望む、人間の真実の姿を教えてくれる存在。
- イ 真子のさびしい気持ちによりそい、一人でも平気だと思わせてくれる存在。
- ウ 何か重要な折には力をあたえてくれ、自分を導いてくれる神秘的な存在。
- エ 心の中の迷いをふりはらうことで、自分の本当の願いに気づかせてくれる存在。

問4 線部③「過酷な旅」とありますが、真子の場合、具体的にどのようなことですか。十五字以内で簡潔に答えなさい。

問5 線部④「真子を、お願いします」、線部⑤「真子をお願いします」とありますが、真子の父と母がこのような応答をしたのはなぜですか。その理由としてふさわしくないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 共同生活の中で、思いやりのある子になってほしいと思ったから。
- イ 夏鈴さんの証言が、娘が本気であることの裏付けとなったから。
- ウ 娘が〈イカル荘〉で暮らす中で大きく成長したことを感じたから。
- エ 現状を変えたいと強く願っている娘の意志を尊重したいから。

問6 線部⑥「それぞれ、三人の娘にぴったり当てはまるんじゃないかな」とありますが、ジジさんがこのように言う理由について、「月」「日」「星」という三つのことばを必ず使って、六十字以内で説明しなさい。

問7 線部⑦『イカル荘のおかげね』耳元でデフィンがささやいたとありますが、デフィンは〈イカル荘〉をどのような場所であると考えていますか。最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 友だちのできない暗い性格でも、そこで過ごすことで、無二の親友と出会う場所。
- イ 自分を温かく見守ってくれる仲間とともに過ごせる、安らぎに満ちあふれた場所。
- ウ 訪ねて来る者をこばむことなく、だれでも外の世界へとつなげてくれる場所。
- エ 親の愛情に飢えた子どもを懐の奥に包み込み、深い愛情を注いでくれる場所。

問8線部「わたし、真子ちゃんのお世話など焼いてませんよ」とありますが、もし、あなたが真子の立場なら、〈イカル荘〉に案内され、やさしくしてもらったにもかかわらず、.....線部のように言われた場合、どのような返事をするでしょうか。あなたの発言がわかるように八十字以内で自由に書きなさい。